

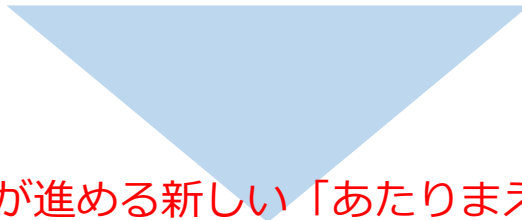
教育DX時代における教育リソース並びにe-Learningの構成



久世均(岐阜女子大学)



- 主体的・対話的な深い学びへの転換
- 大学の新たな展開



デジタル化が進める新しい「あたりまえ」の創出

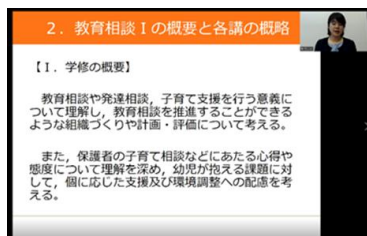
全ての授業をいつでもどこからでも受講
できるデジタルユニバーシティを実現

Multi Campus One Digital University構想

全ての授業をいつでもどこからでも受講できるようなオープンなデジタルユニバーシティの構築



テキストの作成



動画資料の作成

Multi Campus One Digital University



自律的なオンライン講座のデザイン
と教えないで学べる学修環境の設計



E-Learningのイメージ

大学の新たな展開

- ① コーオペ (Co-operative Education) 教育の実現
- ② 主・副専門システムの拡充
- ③ 新たな資格取得の推進
- ④ 自宅・学校での学習の学びの連続性の確保
- ⑤ いつでもどこからでも学べる学習環境
- ⑥ 卒業後の学びへのサポート (生涯学習)

主体的・対話的な深い学びへの転換

- ① ハイブリッド授業
 - ② e-Learning
 - ③ 遠隔授業
 - ④ 対面授業等
- ⇒ 多様な学びへの転換

他大学間でオープンな教育コンテンツの相互流通を実現し、単位連携や単位互換を可能にする。

沖縄女子短期大学やネットワーク大学コンソーシアム岐阜との連携（融合）による地域における知的活動の中心拠点として、高等教育に対する多様なニーズに対応し、地域社会の発展に寄与することを目的に、大学間の単位互換制度を中心に事業として発展

大学の新たな展開の視点

大学教育の質の改善と保証

① コーオペ（Co-operative Education）教育の実現

- レジリエンス（resilience）を高めるためにも3年次以降の授業はe-Learningを中心にした授業にし、大学などの教育機関が主導して、産業界や社会と連携して進められる就業体験・学習往来型教育（コーオペ（Co-operative Education）教育）により実践的な人材を養成する。

② 主・副専門システムの拡充

- 主専門・副専門のシステムを全学的に取り入れ、副専門をe-Learning主体で学ぶことにより、主専門をより深く、また副専門により幅広い専門性をつける。

③ 資格取得の推進

- 資格取得講座をe-Learningで受講できるようにすることにより、いつでもどこからでも繰り返して学ぶことができ、各種資格の取得を促す。

④ 自宅・学校での学習の学びの連続性の確保

- 反転授業などの導入により、大学で学んだことを自宅でも同じ学習環境で学ぶことが可能になり、予習時間や復習時間の確保並びに大学の学びを自宅や第三の学修場所などで連続して学ぶことができる。

⑤ いつでもどこからでも学べる環境

- バスや電車などいつでもどこからでも学べる学習環境とすることで、学びの連続性を保つと同時に学び続ける生活の基本的態度を身につける。

⑥ 卒業後の学びへのサポート（生涯学習）

- 卒業後も必要な学びを大学に求めることで、卒業後の学びのサポートをすることができるように大学に学びの地の拠点を構築する。

主体的・対話的な深い学びへの転換の視点

Multi Campus One Digital University

大学教育の質の改善

- 大学教育のよさをさらに進化させるため、大学教育を通じて学生が身に付けるべき資質・能力や学ぶべき科目、学び方の見通しを示す「学びの地図」を示す。
- これからの時代に求められる知識や力とは何かを明確にし、教育目標に盛り込む。これにより、学生が学びの意義や成果を自覚して次の学びにつなげたり、教員同士が教育目標を共有して「カリキュラム・マネジメント」を実現する。
- 生きて働く知識や力を育む質の高い学習過程を実現するため、各科目における学びの特質を明確にするとともに、「アクティブ・ラーニングの視点」を明確にする。これにより、科目の特質に応じた深い学びと、授業改善を実現する。

大学教育の質の保証

- 教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていること。
- ステークホルダーを地域社会と位置づけ、地域社会に責任ある人材を養成することが大学の使命である。(学生や保護者はストックホルダーでありステークホルダーの一部)
- ディプロマ・ポリシーを出口としたカリキュラム・ポリシー並びにアドミッション・ポリシーの連続性と構造化ができていること。

大学教育の研究

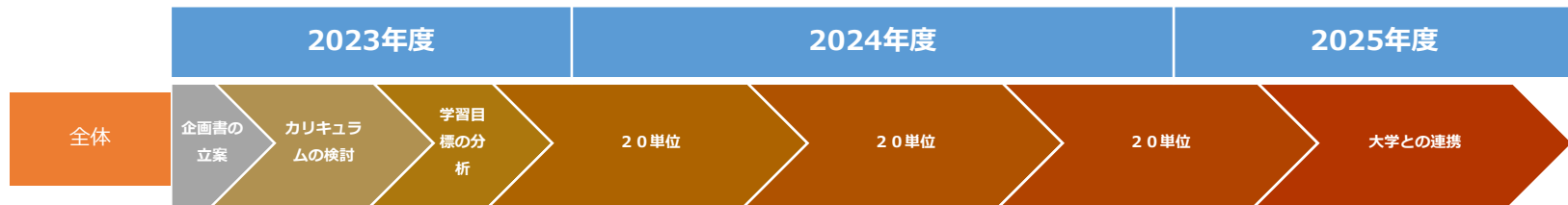
- 教育の内部質保証のための教育アセスメント
- 大学におけるカリキュラム・マネジメント

- 全ての授業をいつでもどこからでも受講できるようなデジタルユニバーシティ（Multi Campus One Digital University）の実現

（文化情報研究センターや沖縄サテライト校・自宅でも学ぶことができる）

- 学生は1000以上の教育用コンテンツにアクセス可能
- 理解・定着を徹底追求した岐阜女子大学メソッドで、学びを活用できる力を育成
- 自律的なオンライン講座のデザインと教えないで学べる学修環境の整備

■ 岐阜女子大学の新たな展開



■ 各専攻で最低60単位をe-Learning化(3年間)



- 主体的・対話的な深い学びへの転換
- 大学間で教育コンテンツの相互流通を実現
- 単位連携や単位互換を可能

主体的・対話的な深い学びへの転換のための学修環境の整備

ハイブリッド型授業とは、対面授業とオンライン授業とを組み合わせた授業システムのこと。

1

ハイブリッド型授業Ⅰ型

対面授業

e-Learning

対面授業

e-Learning

e-Learning

対面授業

繰り返し

反転授業

反転授業（はんでんじやう、英語: flip teaching (or flipped classroom)）は、ハイブリッド型学習の形態のひとつで、学生たちは新たな学習内容を、通常は自宅でオンライン授業を視聴して予習し、教室では講義は行わず、逆に従来であれば宿題とされていた課題について、教師が個々の学生に合わせた指導を与えたり、学生が他の学生と協働しながら取り組む形態の授業。

■ 対面授業とe-Learning を交代に組み合わせて、e-Learningの映像により理論的な学びをし、対面授業によりグループ討議やワークショップを行う。e-Learningにより授業内容に課題や疑問点を持ち対面授業に向かうことで、個別最適化した学びの実現と問題解決能力を身に付けることができる。

2

ハイブリッド型授業Ⅱ型

対面授業

e-Learning

対面授業

■ 対面授業とe-Learning を組み合わせて、最初の対面授業にて授業の目標を明確化し、学習の方法を示したのちにe-Learningによるオンライン授業（オンデマンド学習）に取り組む。E-Learningでは、わからなかった内容を繰り返し閲覧し確認することが、自分の理解度やペースに合わせて繰り返し視聴できるため、予習時の理解も高めることができる。また、復習にも活用することができるため、知識を定着させる効率を高めることができる。

3

ハイブリッド型授業Ⅲ型

e-Learning

■ e-Learning のみでの学修は、いつでも、どこからでも学修ができ、教えないで学べる完成型として位置付ける。社会には多くのオンラインでの学修機会がある。今後、広く深く学びを継続し、学び続ける教師としてハイブリッド型授業Ⅲ型は、発展性がある学習方法になる。

4

教育リソース

テキスト

各種資料のデジタルアーカイブ

質疑・応答への対応

インストラクショナルデザイン
によるテキスト作成

講演・実践の映像、資料のデジタルアーカイブ

Zoomやグループウェアを活用した質問対応

■ 岐阜女子大学の新たな展開

他大学間で教育コンテンツの相互流通を実現し、単位連携や単位互換を可能に

(例 1) メタバース、ドローン、データサイエンスに関する科目
(基礎・応用・実践編)

(例 2) デジタルアーキビスト取得科目(32単位)

(例 3) 小学校教諭一種免許状科目(61単位)

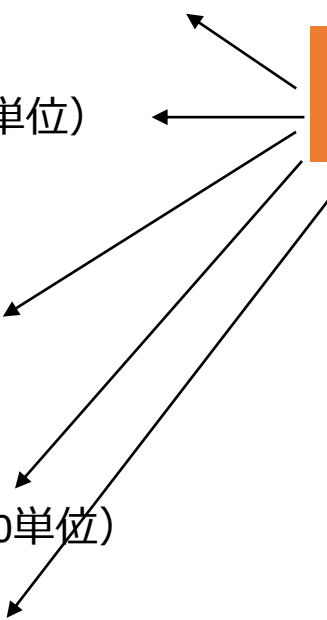
(例 4) 保育士課程に関する科目 (97単位)

(例 5) 図書館司書科目 (24単位)

(例 6) 管理栄養士又は栄養士課程科目 (30単位)

(例 7) 日本語教員に関する科目(27単位)

※履修プログラム制度を利用した公開講座の開発

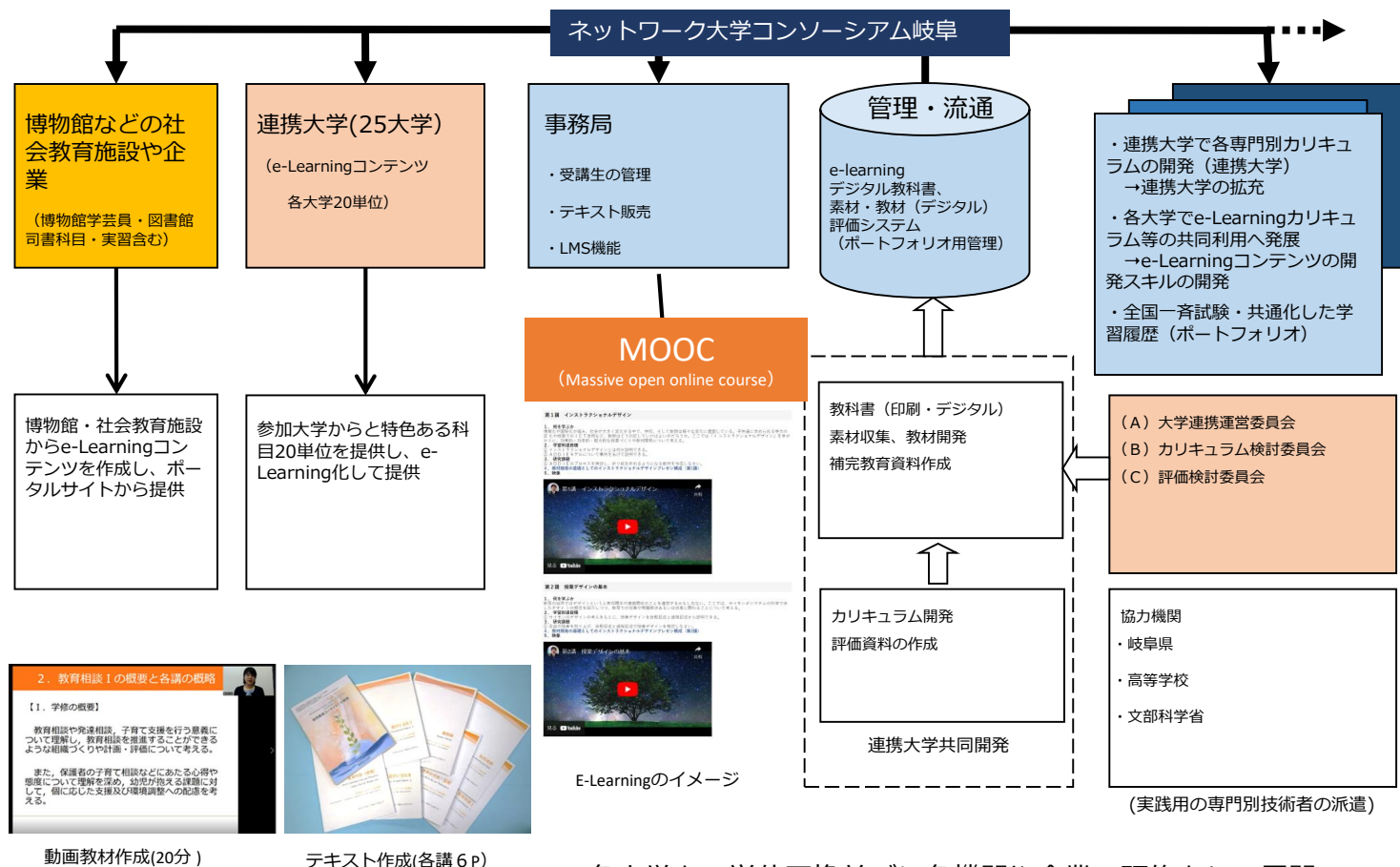


ネットワーク大学コンソーシアム岐阜や沖縄女子短期大学(姉妹校)との連携(融合)による地域における知的活動の中心拠点として、高等教育に対する多様なニーズに対応し、地域社会の発展に寄与することを目的に、大学間の単位互換制度を中心に事業として発展させる。

Multi Campus One Digital University構想

次世代ネットワーク大学コンソーシアム岐阜 (e-learning) 構想

(各大学に開放)



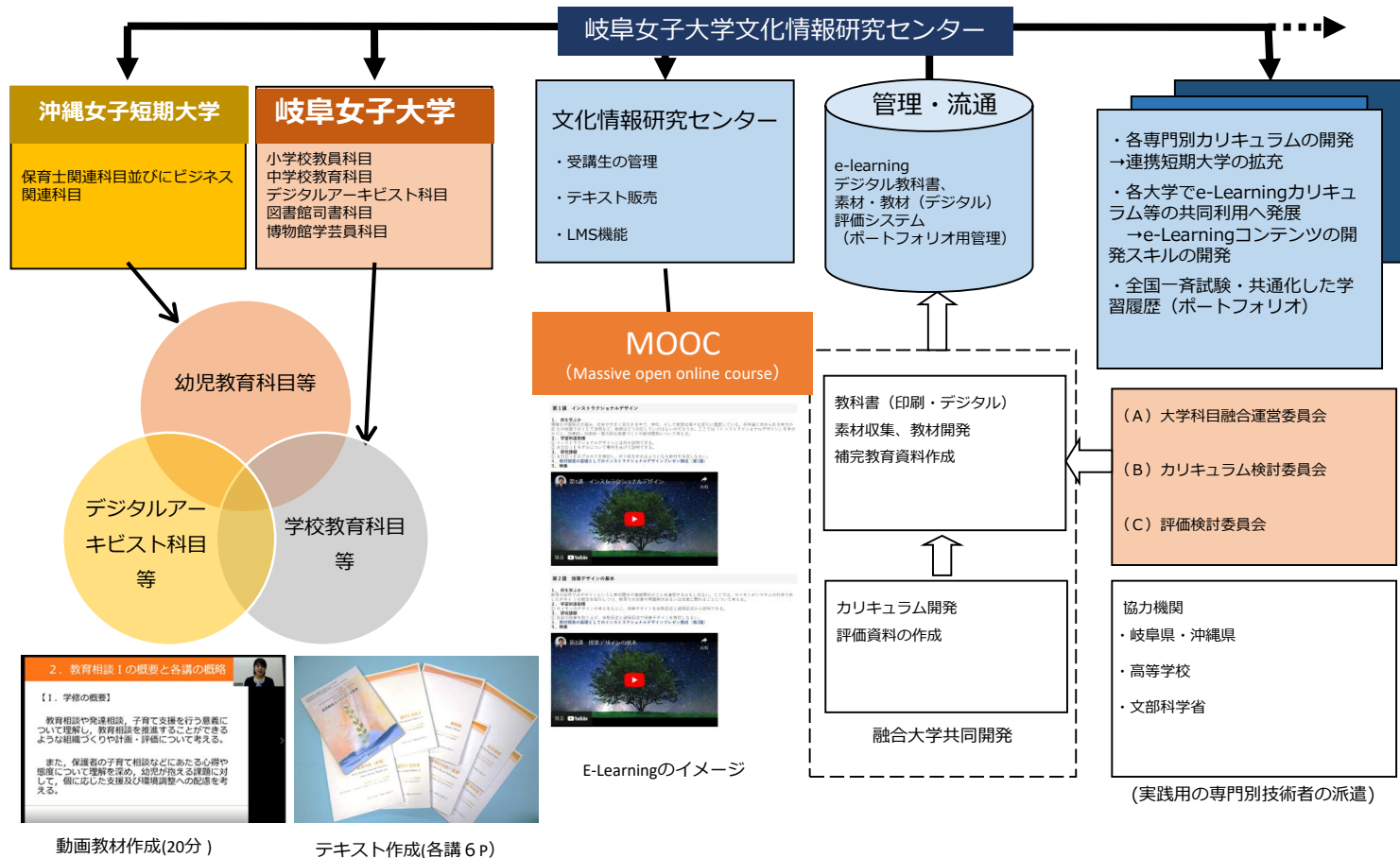
各大学との単位互換並びに各機関や企業の研修として展開

ネットワーク大学コンソーシアム岐阜との連携（融合）による地域における知的活動の中心拠点として、高等教育に対する多様なニーズに対応し、地域社会の発展に寄与することを目的に、大学間の単位互換制度を推進する。

Multi Campus One Digital University構想

岐阜女子大学と沖縄女子短期大学との（e-learning）構想

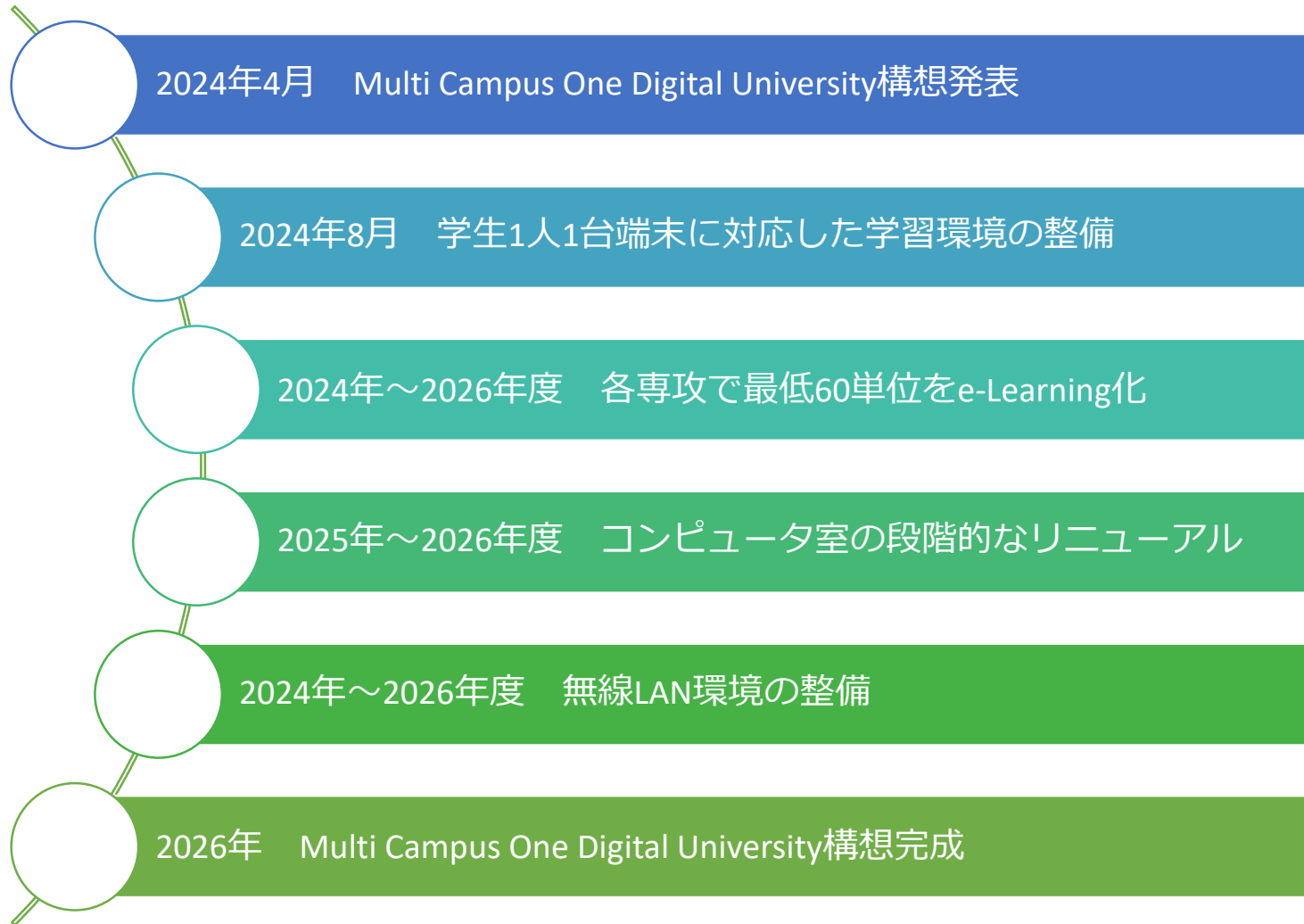
(各大学に開放)



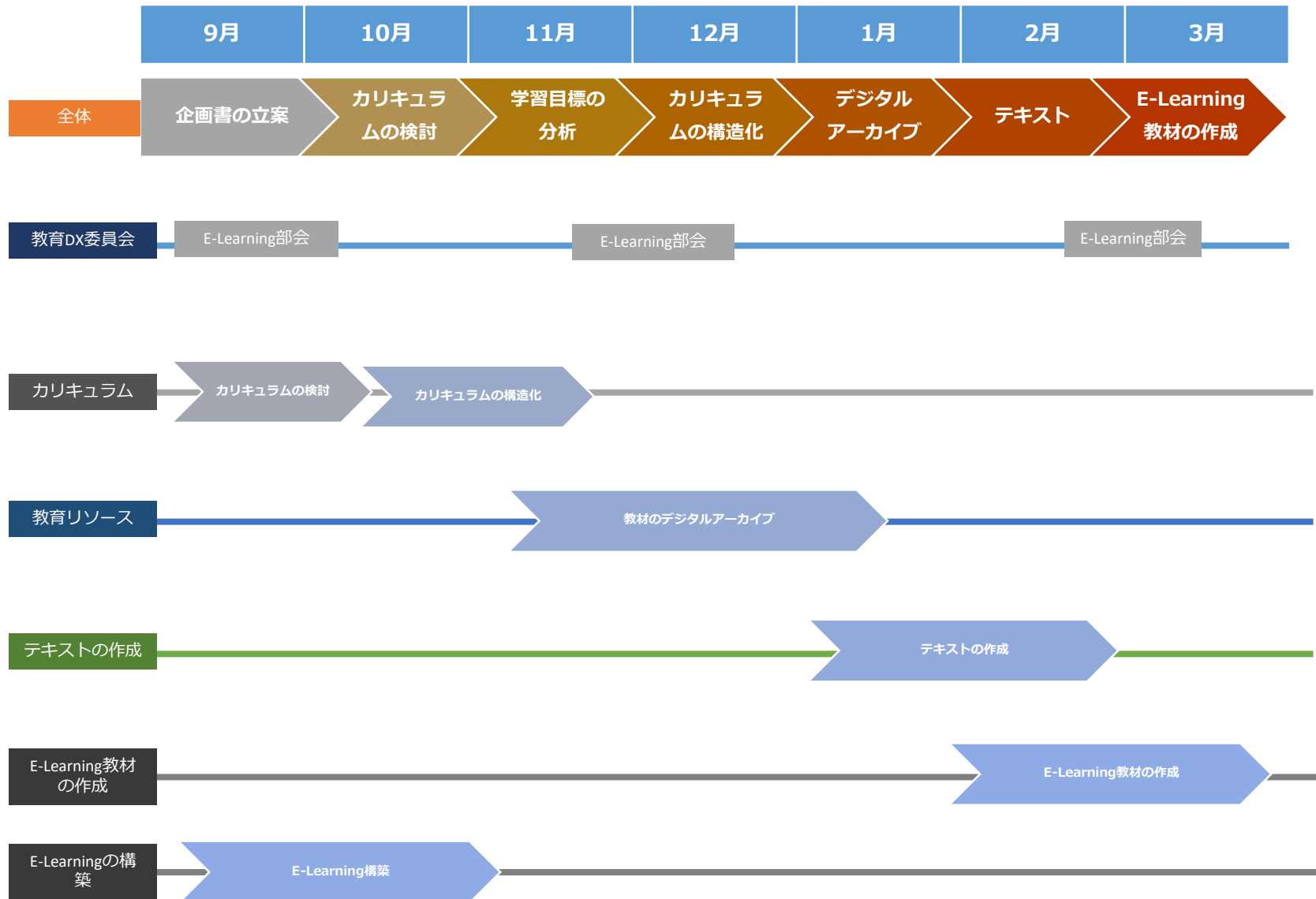
岐阜女子大学と沖縄女子短期大学との単位互換並びに教育委員会や企業の研修として展開

中 縄女子短期大学との連携（融合）による地域における知的活動の中心拠点として、高等教育に対する多様なニーズに対応し、地域社会の発展に寄与することを目的に、大学間の単位互換制度を推進する。

Multi Campus One Digital University構想



e-Learning作成スキーム(2023年度)



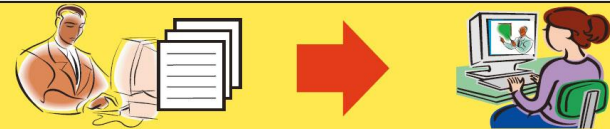
授業目的公衆送信補償金制度

授業目的公衆送信補償金制度は、2018年5月の法改正で創設された制度です。従来の著作権法では、学校等の教育機関における授業の過程で必要かつ適切な範囲で著作物等のコピー（複製）や遠隔合同授業における送信（公衆送信）を著作権者等の許諾を得ることなく、無償で行うことができました（いずれの場合も著作権者の利益を不当に害する利用は対象外です）。

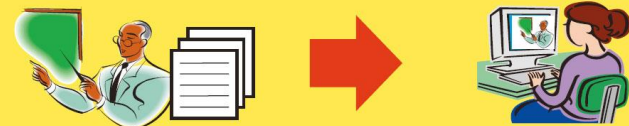
2018年の法改正で、ICTを活用した教育での著作物利用の円滑化を図るため、これまで認められていた遠隔合同授業以外での公衆送信についても補償金を支払うことで無許諾で行うことが可能となりました。

具体的には、学校等の教育機関の授業で、予習・復習用に教員が他人の著作物を用いて作成した教材を生徒の端末に送信したり、サーバにアップロードしたりすることなど、ICTの活用により授業の過程で利用するために必要な公衆送信について、個別に著作権者等の許諾を得ることなく行うことができるようになります。ただ、著作権者等の正当な利益の保護とのバランスを図る観点から、利用にあたっては制度を利用する教育機関の設置者が、補償金を支払うことが必要となっています。

対面授業の予習・復習用の資料をメールで送信
対面授業で使用する資料を外部サーバ経由で送信



オンデマンド授業で講義映像や資料を送信



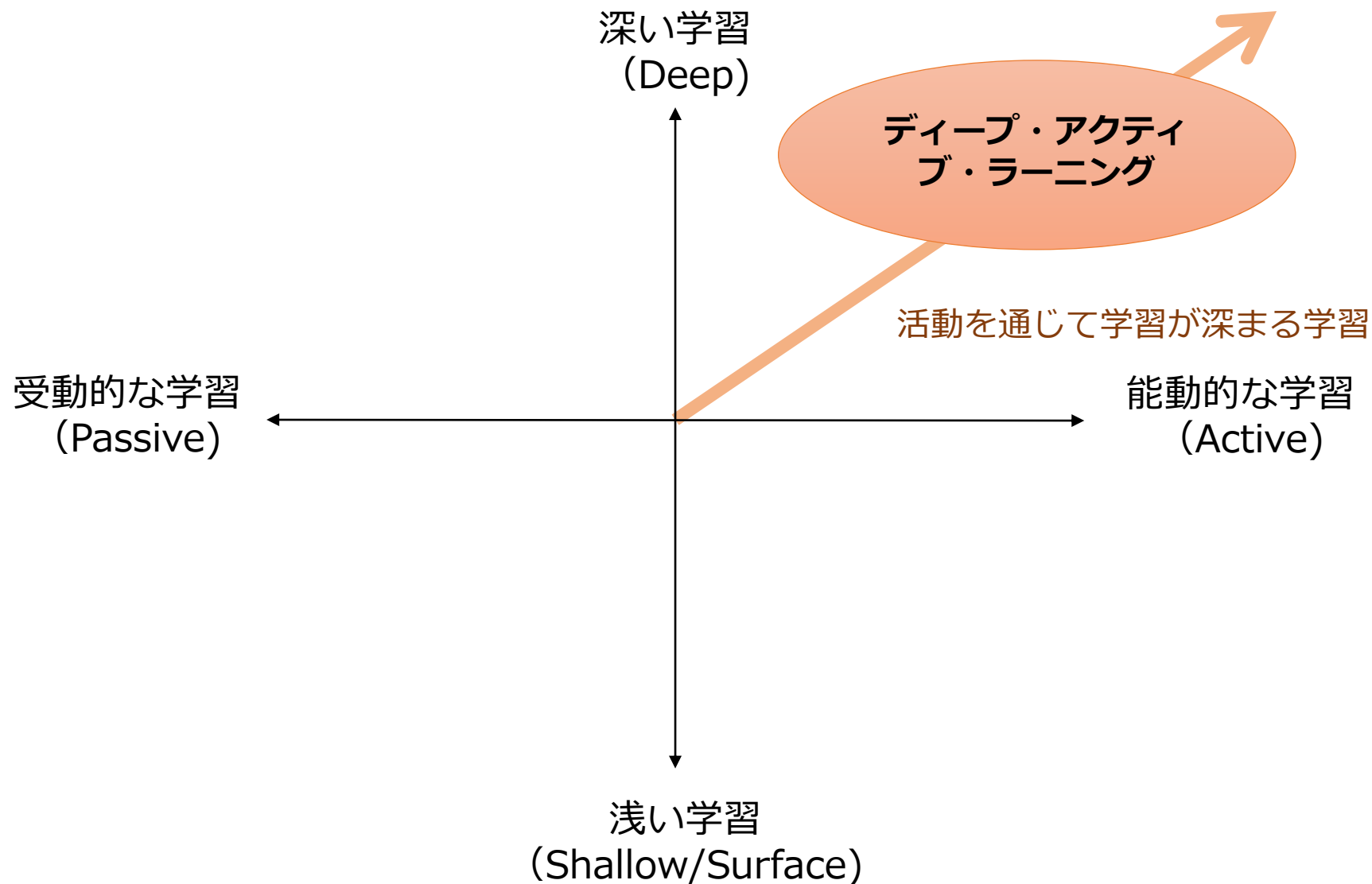
スタジオ型のリアルタイム配信授業



大学教育における主体的・対話的 な深い学びへの転換

Multi Campus One Digital University

学習目標の分析とデザイン



学習目標の分析とデザイン

教育目標の分類学（ブルーム・タキソノミー）

ブルームの教育目標分類学
【認知的領域】
(Bloom, B.S.他)

改訂版ブルーム分類学 (Anderson, L.W.他)

- ① **知識** 情報や概念を想起する
- ② **理解** 伝えられたことがわかり、素材や観念を利用できる
- ③ **応用** 情報や概念を特定の具体的な状況で使う
- ④ **分析** 情報や概念を書く部分に分解し、相互の関係を明らかにする
- ⑤ **総合** 様々な概念を組み合わせて新たなものを形作る
- ⑥ **評価** 素材や方法の価値を目的に照らして判断する

知識次元	認知過程の次元					
	① 記憶	② 理解	③ 応用	④ 分析	⑤ 評価	⑥ 創造
事実的認識						
概念的知識						
遂行的知識						
メタ認知的知識						

学習目標の分析とデザイン

学習への深いアプローチと浅いアプローチの特徴

深いアプローチ

- これまで持っていた知識や経験に考えを関連づけること
- パターンや重要な原理を探すこと
- 根拠を持ち、それを結論に関連づけること
- 論理や議論を注意深く、批判的に検討すること
- 学びながら成長していることを自覚的に理解すること
- コース内容に積極的に関心を持つこと

浅いアプローチ

- コースを知識と関連づけないこと
- 事実を棒暗記し、手続きをただ実行すること
- 新しい考えが示されるときに意味を理解するのに困難を覚えること
- コースか課題のいずれにも価値や意味をほとんど求めないこと
- 目的や戦略を反映させずに勉強すること
- 過度のプレッシャーを感じ、学習について心配すること

活動の「動詞」から見る学習への深いアプローチと浅いアプローチの特徴

学習活動	深い アプローチ	浅い アプローチ
●振り返る ●離れた問題に適用する ●仮説を立てる ●原理と関連づける ●身近な問題に適用する ●説明する ●論じる ●関連づける ●中心となる考えを理解する ●記述する ●言い換える ●文章を理解する ●認める・名前をあげる ●記憶する		

Entwistle, McCune, & Walker (2010), table 5.2 (p.109)の一部を翻訳

Biggs & Tang (2011), Figure 2.1 (p.29)の一部を翻訳・作成

『ディープ・アクティブラーニング 大学授業を深化させるために』第1章（溝上慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）執筆）より 195

学習目標の分析とデザイン(例)

タキソノミーテーブル（教育目標の分類体系：タキソノミー）

(〇〇する力がある) 内容 事実、概念、 手続き、メタ認知	①記憶する	②理解する	③応用する	④分析する	⑤評価する	⑥創造する
	再認、再生	解釈、例示、分類 推論、比較、説明	実行、遂行	比較、組織、結果と原因	チェック、判断	生み出す、計画できる、汎化
	書く、暗唱する 組み合わせる 辞書・ネットで調べる	説明する 他に例える 要約する	道具や方法を選ぶ 実験や実演で試す プレゼンする	他の結果と比較する 基準に照らして考察する 図やグラフを組み合わせる	良否を判断する 優先順位をつける 採点・審査する	解決案を考案する 解決策の実行を管理する 解決システムを設計する
1.インストラクショナルデザイン	インストラクショナルデザインとは何か説明できる。	A D D I E モデルについて事例をあげて説明できる。				A D D I E のプロセスを検討し、折り紙を折れるようになる教材を作成できる。
2. システム的なアプローチによる講座の設計		サイモンのデザインの考えをもとに、授業デザインを状態記述と過程記述から事例をあげて説明できる。				各自の授業を取り上げ、状態記述と過程記述で授業デザインを図示できる。
3. 21世紀に求められる学力と学習環境						
4. 研修の分析と設計						
5. 学習目標のデザイン						
6. e-Learningの方法と技術						
7. ハイブリッド型授業の方法と技術						
8. 魅力ある授業をつくる						
9. 学習意欲を高める						
10. 協働的な学びをデザインする						
11. ICTの活用とその効果						
12. 行動変容のモニタリング技法						
13. 教授・学習の理論と教育実践						
14. 「教えないで学べる」研修企画						
15. ワークショップデザイン技法						19

学修モデル（案）

第 4 講	教材の分析と設計	時間	学修内容	資質・能力との関連など
何を学ぶか	○目標分析をできないと評価規準をつくるのは難しいと言われる。「目標分析をする」とは、目標の構造を捉えることである。 ○つまり、目標は平面的で、それだけでは構造はわからない。しかし、目標を分析して構造がわかると、評価規準ができる。目標の構造がわかるといのは、評価規準のなかで、重要度を決定することである。 ○「この単元で何をしたいのか、何を教えたいか、何を指導したいか、どのような順序で教えるのか」を決定する。そして、「それを指導するために、何がいるのか」を考える。	10分	1. 自己学修 テキストを見て、学習目標・学修到達目標・研究課題の確認。	育成する資質能力との関係 ○目標を分析して構造がわかると、評価規準ができる。目標の構造がわかるといのは、評価規準のなかで、重要度を決定することを考えることができる。
		20分	2. e-Learning教材視聴	・テキスト内容は事前に読んでおき、問題点や課題を明らかにしておく。
		10分	3. 学修到達目標の達成度評価	・e-Learning教材を視聴しながら、再度テキストを確認する。
学修到達目標	① 何を教えるのか、そのための教材作成のあり方について説明できる。 ② システム的な教材設計・開発の手順を5つに分けて説明できる。	20分	4. e-Learning教材再視聴	・学修到達目標を確認し、具体的に学修が到達できたかについてセルフチェックする。
研究課題	① あなたは、どのような場面でメディアの影響を強く受けていると思うか、また、どのような場面でメディアの影響をあまり受けていないと思うかグループで話し合って発表しなさい。 ② テレビなどのCM は、専門家がなんとか視聴者をひきつけようとして創作した作品である。どんなCM が印象に残っているか。それは何故か。メディアの特性をどのように使っているか。グループで話し合って発表しなさい。 ③ インターネットで、いくつかの教材を調べて、その教材の有効性を5段階で判定しなさい。そして、どのような要因でその判定結果になったかを、書きなさい。	10分	5. 学修到達目標の達成度評価	・再度、重要な部分のみe-Learning教材を再視聴する。
		40分	6. 研究課題	・学修到達目標を確認し、具体的に学修が到達できたかについて再度セルフチェックする。
		10分	7. 学修の振り返り	・研究課題をレポートに作成する。
				20 ・学修の振り返りをする。

教育リソース（資料集）

科目区分	科目名	授業形態	時間数	幼児教育に関する資料・教材のデジタルアーカイブ
領域及び保育 内容の指導法 に関する科目	遊びと文化Ⅰ 遊びと文化Ⅱ	講義	15	1. 遊びと文化Ⅱ デジタルテキスト 2. 遊びと文化Ⅱ e-Learning 教材 3. 遊びと文化Ⅱ 学習の手引き 4. 動く紙おもちゃ作成Webサイト 5. 動く紙おもちゃ論文集 6. 動く紙おもちゃに関する動画教材
	保育内容（表現）	講義・演習	15	1. 保育内容(表現) デジタルテキスト 2. 保育内容(表現) e-Learning 教材 3. 保育内容(表現) 学修の手引き 4. 保育内容に関する動画教材
教育の基礎的 理解に関する 科目	教師論	講義	15	1. 教師論 デジタルテキスト 2. 教師論 e-Learning 教材 3. 教師論 学習の手引き 4. 教師論に関する動画教材
道徳、総合的 な学習の時間 等の指導法及 び生徒指導、 教育相談等に 関する科目	教育の方法・技術	講義・演習	15	1. 教育の方法・技術 デジタルテキスト 2. 教育の方法・技術 e-Learning 教材 3. 教育の方法・技術 学修の手引き 4. 教材開発の基礎としてのインストラクショナルデザインWebサイト 5. 授業アーカイブ デジタルテキスト 6. 教育の方法・技術に関する動画教材
	幼児理解 教育相談Ⅰ	講義・演習	15	1. 教育相談Ⅰ デジタルテキスト 2. 教育相談Ⅰ e-Learning 教材 3. 教育相談Ⅰ 学修の手引き 4. 教育相談に関する動画教材

講座の構成

第 1 講	幼児教育コーディネータ養成講座
全体目標	
一般目標	
到達目標	
求められる資質能力	
内 容	
ワークショップ 課題	
教育リソース	

本学のカリキュラムメソッド(例)

【幼稚園教諭免許状関連公開講座の例】

＜令和3年度 幼稚園教諭2種免許状保有者のための一種免許状上進公開講座＞
(幼稚園教諭の人材確保・キャリアアップ支援事業(文科省委託))

○特色:・土日祝の対面とe-Learningと実践課題への取り組み(ハイブリット方式)



＜令和4年度 幼稚園教諭2種免許状保有者のための一種免許状上進公開講座＞
令和4年度 幼児教育の人材確保・キャリアアップ支援事業(文科省委託)
「幼児教育コーディネータ養成講座」

○特色:・テキストとe-Learningの併用取り組みによる講座実施
・遠隔講座(Zoom:1日)とオンデマンドの組み合わせでの講義を実施
・本学履修証明プログラムでの実施

本学のカリキュラムメソッド(例)

【本学の カリキュラムメソッド】

＜令和3年度 幼稚園教諭2種免許状保有者のための一種免許状上進公開講座＞
(幼稚園教諭の人材確保・キャリアアップ支援事業(文科省委託))

○特色:土日祝の対面とe-Learningと実践課題への取り組み(ハイブリット方式)



学ぶ方法

＜令和4年度 幼稚園教諭2種免許状保有者のための一種免許状上進公開講座＞
令和4年度 幼児教育の人材確保・キャリアアップ支援事業(文科省委託)
「幼児教育コーディネータ養成講座」

○特色:テキストとe-Learning併用の取り組みによる講座実施
⇒カリキュラムの構造化・テキストの開発



学ぶ内容

資質能力の構造化, タキソノミーテーブル開発



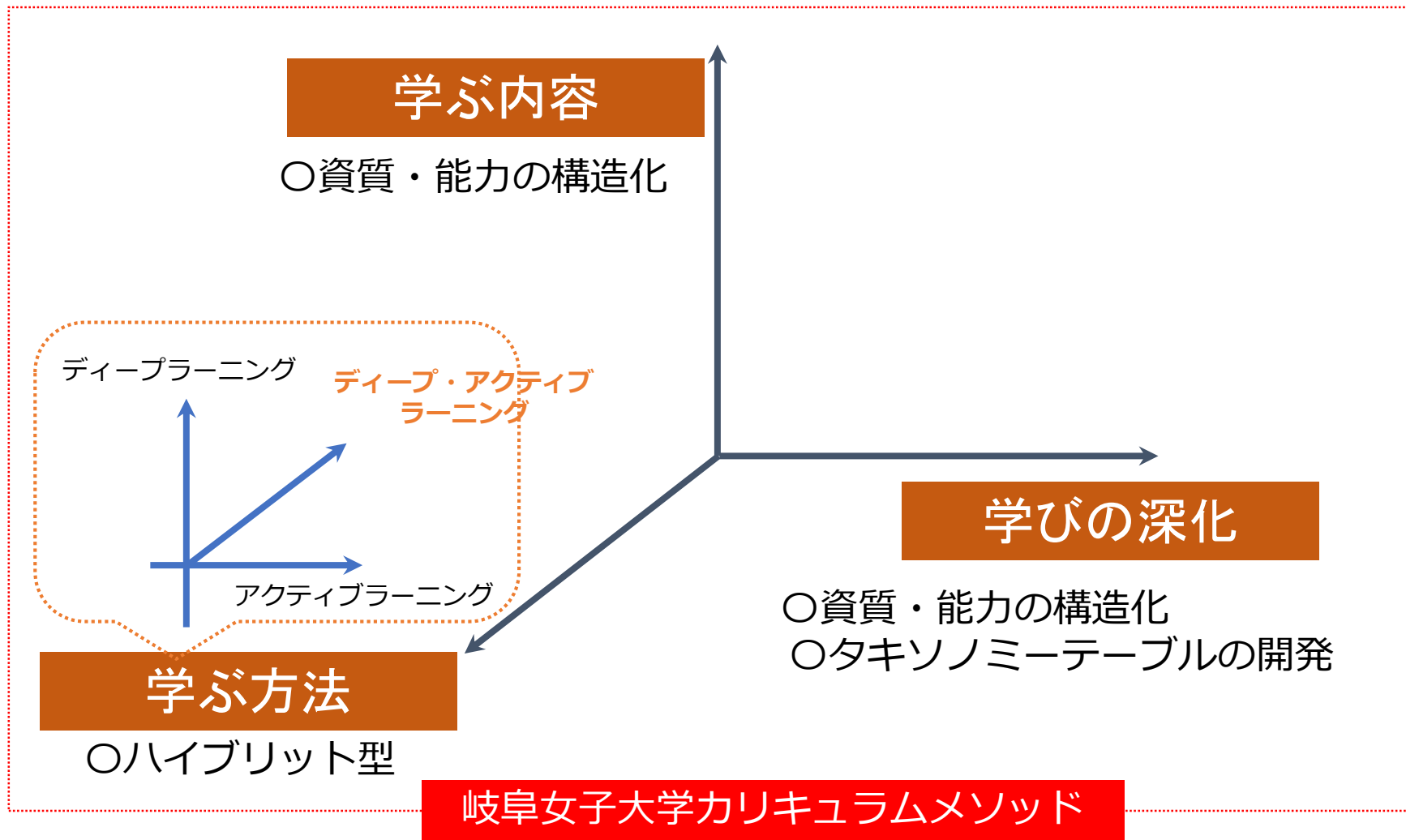
学びの深化

○特色:遠隔講座(Zoom)とオンデマンドの組み合わせでの講義を実施



学ぶ方法

本学のカリキュラムメソッド



ハイブリット型授業のデザインと教えないで学べる学修環境の整備

ハイブリット型授業とは、対面授業とオンライン授業とを組み合わせた授業システムのこと。

1

ハイブリット型授業Ⅰ型

対面授業

e-Learning

対面授業

e-Learning

e-Learning

対面授業

繰り返し

反転授業

反転授業（はんでんじやぎょう、英語: flip teaching (or flipped classroom)）は、ハイブリット型学習の形態のひとつで、学生たちは新たな学習内容を、通常は自宅でオンライン授業を視聴して予習し、教室では講義は行わず、逆に従来であれば宿題とされていた課題について、教師が個々の学生に合わせた指導を与えたり、学生が他の学生と協働しながら取り組む形態の授業。

■ 対面授業とe-Learning を交代に組み合わせて、e-Learningの映像により理論的な学びをし、対面授業によりグループ討議やワークショップを行う。e-Learningにより授業内容に課題や疑問点を持ち対面授業に向かうことで、個別最適化した学びの実現と問題解決能力を身に付けることができる。

2

ハイブリット型授業Ⅱ型

対面授業

e-Learning

対面授業

■ 対面授業とe-Learning を組み合わせて、最初の対面授業にて授業の目標を明確化し、学習の方法を示したのちにe-Learningによるオンライン授業（オンデマンド学習）に取り組む。E-Learningでは、わからなかった内容を繰り返し閲覧し確認することが、自分の理解度やペースに合わせて繰り返し視聴できるため、予習時の理解も高めることができる。また、復習にも活用することができるため、知識を定着させる効率を高めることができる。

3

ハイブリット型授業Ⅲ型

e-Learning

■ e-Learning のみでの学修は、いつでも、どこからでも学修ができ、教えないで学べる完成型として位置付ける。社会には多くのオンラインでの学修機会がある。今後、広く深く学びを継続し、学び続ける教師としてハイブリット型授業Ⅲ型は、発展性がある学習方法になる。

4

教育リソース

テキスト

インストラクショナルデザインによるテキスト作成

デジタルアーカイブ

講演・実践の映像、資料のデジタルアーカイブ

質疑・応答

Zoomやグループウェアを活用した質問対応

② 資質能力の構造化

■ デジタル変革に対応したskill upからSkill change授業

■ 自律的なオンライン授業とデジタル変革への意識改革

■ 知識・技能から資質能力への転換

オンライン教育における効果的・
効率的・魅力的な教育プログラム

インストラクショナル
デザイン指導力

オンライン教育での実践的な課
題解決型授業（オンラインワー
クショップ）

※ インストラクショナルデザイン指導力：学習成果のエビデンスに基づく効果的な教育実践を幼児教育に普及できる指導力。
※ インストラクショナルデザインとは、「何を（What）できるようにするのか？」を明確にしたうえで、「どうやって（How）できるようにするのか」をルールに基づいて体系的に考えることにより、効果的・効率的・魅力的な教育プログラムを作成するための方法論。

教育DX時代の大学教育（1）



NEWS

2023.04.11 [お知らせ]

【講義】情報処理Ⅱ ～情報と人権～ 【2023年度版】

About

事業内容

本事業は、地域に根差し地域社会に貢献する大学として、本学独自で育んできたデジタルアーカイブ研究を活用し、地域資源のデジタルアーカイブ化とその展開によって、伝統文化産業の活性化などの地域課題の実践的な解決や新しい文化を創造できる人材育成を行い、地域の知の拠点となる大学を目指すものである。

現状と課題認識



目的



計画の内容



教育DX時代の大学教育（1）



遠隔教育特講

第1講 教育DX時代における新たな学び

1. 何を学ぶか

子供たち一人一人に個別最適化され、創造性を育む学びとは何か、その実現のための“新たな学び”とはどのような学びで、従来の学びとどのように異なるのかについて考える。

2. 学修到達目標

- ・教育DX時代の社会の変化について説明できる。
- ・教育DX時代における新たな学びについて具体例を示して説明できる。
- ・従来の学びと教育DX時代における“新たな学び”との関係について説明できる。

3. 課題

1. 教育DX（Digital Transformation）についてその効果と可能性について説明しなさい。
2. GIGAスクール構想について、具体例を挙げて説明しなさい。

4. プレゼン資料

遠隔教育特講_プレゼン（第1講）

5. 動画資料



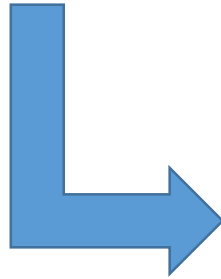
6. 資料

- ① デジタル推進化プラン
- ② GIGA スクール構想の下で整備された1人1台端末の積極的な利活用等について（通知）
- ③ ポスト・コロナ期における新たな学びの在り方について
- ④ GIGA スクール構想の実現

教育DX時代の大学教育



① 自律的なオンライン講座のデザインと教えないで学べる学修環境の設計 ③ 学習環境としての教育リソースの整備



学習内容の基礎や
発展のための情報
= 教育リソース

<テキスト>

第1講 小中連携教育に関する社会的背景

【学習目標】

- ・小中連携教育に関する社会的課題について説明できる。
- ・小学校教員に求められる専門性について具体例を示して説明できる。
- ・小学校と中学校の連携は誰の在り方について説明できる。

1. 小中連携教育に関する社会的課題

小中連携教育については、これまで全国的な制度や支援の在り方等に関する検討はなされていない。児童が、小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活へ移行する段階で、不安感等が増加したりするいわゆる中1ギャップが指摘されている。各自治体によれば、「授業の連続性」「学校の楽しさ」「教科や活動の時間の過ごし方」について、中学生になると肯定的回答をする生徒の割合が下がることがあることや、「学習上の悩み」として「上級校での学力が自分からいまい」と回答する児童生徒数や、暴力行為の児童生徒数、いじめの認知件数、不登校児童生徒数が増加傾向にあることと人権に絡める実態が明らかになっている。

幼児学習については、平成22年に「幼児期の教育と小学校教育の円滑な移行に関する調査研究協力者会議」の報告がなされており、ここでは、幼児期の教育と小学校教育は教育の目標を「学びの基力の育成」として捉え、1つ1つの教育を円滑に昇進させることが重要といった、両者の関係を「連続性・一貫性」で捉える考え方が示された。

そのために、本学としては令和4年度(2022)より「幼児教育コーディネーター養成カリキュラム」を開発し、講座を開講しているところである。

また、中高一貫教育については、子供たちや保護者などの選択の幅を広げ、学校側の個別化対応を進める観点から、生徒の個性や価値観を伸ばすことを目的として、平成11年度に中高一貫教育制度が全国的に導入され、平成23年に文部科学省において当該制度の成果と課題について報告を行い、中高一貫教育が今後とも期待される教育を展開することを促すため、教育関係者の理解の拡大が求められている。

小中連携教育、一貫教育に取り組む学校、市町村においては、小学校から中学校への進学において、新しい環境での学習や生活へ移行する段階で、不安感等の生徒数の上昇傾向につながっていく学習等(いわゆる中1ギャップ)に直面し、小学校から中学校への対応を円滑化させる必要

性を認識し、小中連携教育、一貫教育に取り組むためのケースが見られる。特に、学校の運営・施設に関する現状と課題認識において共通点があり、児童生徒の学びが早まっていることを踏まえ、小学校高学年から中学校入学後までの期間に高1、当校特別に重点的な取り組みを行う例が見られる。

小中連携、一貫教育に取り組むためには適切な人材の確保が課題となっており、学校・自治体・市町村においては、それぞれの課題認識に基づいて人材を確保する必要がある。自治体・市町村で共有し、学校全体で課題に取り組むことで、小中一貫教育の成果を上げることが期待される。

2. 小中連携教育の推進向上

令和3年1月26日「中央教育審議会」「令和の日本型学校教育」の審議を踏まえ、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現(高学)において次のような提言がされている。

(1) 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

【教員への姿】

- ・教員が教員の素養や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教員生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的に学び、知識・技能を身に付け、子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての覚悟を果たしている。その際、子供の主体的な学びを支える伴走者としての能力も備えている。

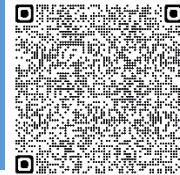
- ・教員養成、採用、研修制度も高めた方策を通じて、多様な人材の教育者としての可能性や教員の資質・能力の向上により、質の高い教育環境が実現されるとともに、教員と、教員・事務等に通じる専門職である事務職員、それぞれの分野で専門性を発揮する多様な外部人材や専門スタッフ等がチームとなり、個々の教員がチームの一員として役割・協働的に取り組む力を発揮しつつ、校長のリーダーシップの下、家庭や地域社会と連携しながら、共通の学校教育目標に向かって学校が運営されている。

- ・さらに、学校における働き方改革の実現や労働力の確保、新卒の学びを支える環境整備により、教員が主体的で魅力ある仕事であることと認識でき、教員を目指す人々の増加に、教員自身も意欲を高め、誇りを持って働くことができる。



「令和の日本型学校教育」の推進を踏まえて、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現(高学)

教育DX時代の大学教育（2）



【講義】情報処理Ⅱ～情報と人権～【2022年度版】

本講座のポイント

アメリカ国立訓練研究所の研究によると、学習方法と平均学習定着率の関係は「ラーニングピラミッド」という図で表すことができます。大学の授業や会社の新人研修などでは、講義・実技・議論などさまざまな方法で学習を行いますが、学習時間が限られていて状況では、より効率の良い方法での学習がスムーズに学習内容を身につけることにつながります。

つまり、ラーニングピラミッドは受動的な学習から能動的な学習までを段階的に行い、学習の定着率アップを図っていく方法です。

物事を他人に教えるためには、自分でしっかりと内容を理解していなければならないため、ラーニングピラミッド理論では、もっとも知識の定着率が高い段階とされています。

そこで、本講座は、学生と協働して、e-Learningコンテンツを作成します。

学生は、各テーマに基づいて興味がある内容を選択し、最新情報も調査しまとめてプレゼン資料と動画資料を作成し人に教えることによって学ぶ方法を教えます。

第1講 身の回りの情報化

1. 学習のポイント

高度情報化社会と！IT革命などというまでもなく、パソコンやインターネットは急速に普及していますし、それにより、生活にも多くの変化が進んでいることは私たちが実感していることです。ここでは、それをデータにより確認することを目的とします。これらの発展は急速ですので、すぐに時代遅れのものになってしまいます。

2. 重点事項

- (1) 家庭での普及率は40%になりワープロ普及率を超え（ワープロ専用機は有力メーカーが2000年に続々と撤退しました）るなど、家庭でのパソコン所有率・利用率は急速に増加しています。
- (2) インターネットの利用内容も大きく変化してきました。従来は、職場や学校からの利用が多かったのに、最近では自宅からの利用が増大しています。職場・学校での利用者の大部分は、自宅でも利用しているといえます。それとともに、利用者での女性やパソコン初心者割合が急速に増えています。このように、インターネットは生活の中に溶け込んできたといえましょう。

3. キーワード

ムーアの法則、パソコンの諸元、パソコン・携帯電話・デジタルカメラ・インターネットの普及率、ブロードバンド

4. 課題

第1問 インターネットなどの普及は急速であり、現在は本文のデータとはかなり異なっていると思われる。参考URLにより現在のパソコンやインターネットの普及状況を調べましょう。また、あなたのグループ（学校のクラスや会社の部課など）での普及状況と比較してみましょう。

第2問 家庭でのインターネット利用の増加により、どのような家庭での生活の変化、情報提供側の変化が起こっている（将来起こる）と考えられますか。

5. プレゼン資料

身の回りの情報化

6. 動画資料

教育DX時代の大学教育（3）



【講義】教材リサーチ I

【講義】教材リサーチ I

I はじめに

21世紀の知識基盤社会における「学力」は「他者と協働しつつ創造的に生きていく」ための資質・能力の育成である。そのため、授業では、他者と共に新たな知識を生み出す活動を引き出しつつ深い知識を創造させていく経験を、数多く積ませることが重要である。また、情報化や国際化が進み、社会が大きく変化する中で、学校、そして教師は様々な変化に直面している。児童・生徒に求められる学力の変化や授業でのICT活用など、教師はどう対応していけばよいのだろうか。本講座では「インストラクショナルデザイン」を手がかりに、教材開発の基礎としてのインストラクショナルデザインについて考えていく。

II 授業の目的・ねらい

高度情報社会は新しい課題を世界にもたらし、新しい解を生み出せる人間を求める社会である。つまり、これからの社会は、一部の専門家があらかじめ有する「正解」を適用するだけで解決できるものではなく、問題を共有する者が知識やアイデアを出し合い、不完全にせよ解を出して実行する。そして、その結果を見ながら解とゴールを見直すことが求められている。このような課題に対して、社会全体が応えようとしている表れが、知識基盤社会、コミュニティ基盤社会への転換と進展、ICTの利活用である。知識基盤社会とは、新しい知識やアイデア、技術のイノベーションがほかの何よりも重視される社会である。そのイノベーションのために、他者とのコミュニケーションやコラボレーション（協働、協調）が重視され、それらが効果的・建設的に行えるように、人と人を繋ぐコミュニティやICTの役割に注目が集まっている。つまり、現在決まった答えのないグローバルな課題に対して、大人も子供も含めた重層的なコミュニティの中で、ICTを駆使して一人ひとりが自分の考えや知識を持ち寄り、交換して考えを深め、統合することで解を見出し、その先の課題を見据える社会へと、社会全体が転換しようとしている。ここでは、その高度情報社会とそれに応じて求められる資質や能力について考える。

III 授業の教育目標

教育情報とは、検索利用可能な形で集積され、流通される情報を第一義的なものと考え、狭義には学資教材情報を、広義には、教育研究情報や教育の管理経営の情報その他を含めて考えることが情報管理論的に妥当である。こうした教育情報のシステムは、すでに学術的には開発され、試行されているものがあるので、これを基準に、教育情報について体系的に考察する。

- (1) 「インストラクショナルデザイン」を手がかりに、効果的・効率的・魅力的な授業づくりや教材開発について考える。
- (2) 21世紀に求められる学力を育む新たな授業と評価を、背景や実践事例を紹介しながら考える。
- (3) 目標を分析して構造がわかると、評価基準ができる。目標の構造がわかるというのは、評価基準のなかで、重要度を決定することを考える。
- (4) 企業の教材開発の視点を考える。
- (5) 協働学習の手法の一つである「ジグソー学習法」を経験し、学習者自身で知識を統合して答えを出す学習活動過程について理解を深め、その効用を考える。

第1講 インストラクショナルデザイン

1. 何を学ぶか

情報化や国際化が進み、社会が大きく変化する中で、学校、そして教師は様々な変化に直面している。子供達に求められる学力の変化や授業でのICT活用など、教師はどう対応していけばよいのだろうか。ここでは「インストラクショナルデザイン」を手がかりに、効果的・効率的・魅力的な授業づくりや教材開発について考える。

2. 学習到達目標

- ① インストラクショナルデザインとは何か説明できる。
- ② ADDIEモデルについて事例をあげて説明できる。

3. 研究課題

- ① ADDIEのプロセスを検討し、折り紙を折れるようになる教材を作成しなさい。

4. 教材開発の基礎としてのインストラクショナルデザインプレゼン構成（第1講）

5. 映像



教育DX時代の大学教育（3）

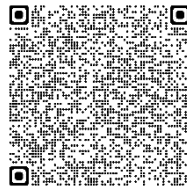


【講義】教材リサーチ I

2022年度 作成教材



教育DX時代の大学教育（4）



【講義】企業とデジタルアーカイブ

令和3年度（2021年）

①岐阜市シティプロモーション



②越前市シティプロモーション



④養老町シティプロモーション



令和4年度（2022年）

①瑞穂市シティプロモーション(1)



教育DX時代の大学教育



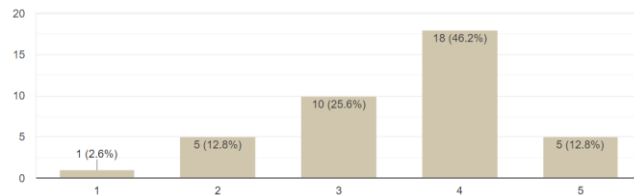
E-Learning学修環境の評価

R3・4年度 情報の管理と流通 e-Learningの評価(本学の学生：39名)

(1) この教材で楽しく学習できましたか？

コピー

39 件の回答

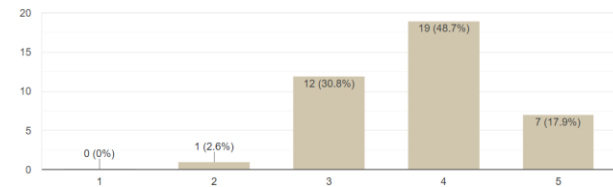


楽しい

(3) この教材で学修することにより学修到達目標を達成できましたか？

コピー

39 件の回答

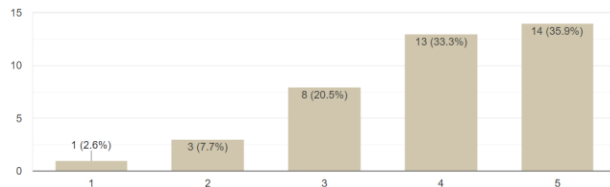


達成できた

(7) 今後同じような教材を利用したいですか？

コピー

39 件の回答

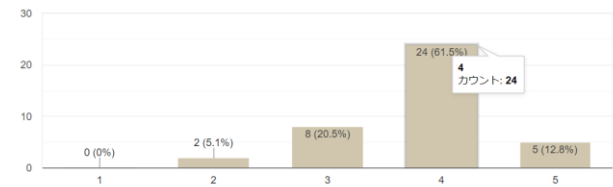


利用したい

(6) この教材により興味・関心が高めることができましたか？

コピー

39 件の回答



高まった

e-Learning 教材(例)

プレゼン資料

幼児教育コーディネータ養成講座
[遊びと文化Ⅱ]

第1講「遊びと文化Ⅱ」

教員名

第1講「遊びと文化Ⅱ」

【目的】

【学修到達目標】

第1講「遊びと文化Ⅱ」

幼児教育コーディネータとは・・・

本文

2

3

ワークショップ

課題

【具体的な方法】

- a. ・・・。
- b. ・・・。
- c. ・・・。

4

【具体的な方法】

- a. ・・・。
- b. ・・・。
- c. ・・・。

5

動画資料



動画時間：15から20分/講

デジタルテキスト

第 1 講 インストラクショナルデザイン

亀井美穂子（椋山女学園大・准教

授）

【学習到達目標】

- ・ 学力の定義と 21 世紀型スキルについて説明できる。
- ・ 求められる学力について説明できる。

1. 現代社会の特徴

ICT は、その能力の指数関数的な向上及び価格低下に伴い、世界全体に急速に浸透し、ICT 産業にとどまらず、他の産業や社会全体、企業のビジネスモデル、個人のライフスタイルなど様々な領域で大きな変化をもたらしている。スマートフォンへのシフト、コモディティ化、新興国市場の拡大は、従来の市場競争のあり方を根本から変えることで、個々の企業の競争力・業績に大きな影響を与え、環境変化に適応した企業が業績を拡大する一方、従来型の市場で大きなマーケットシェアを持っていた企業が業績の不振に苦しんでいる。加えて、スマートフォンや SNS 等の普及は人々のライフスタイルやワークスタイルに大きな変化をもたらし、人々の情報行動 1 を大きく変化させるとともに、新たな就業のスタイルを生み出し

平成 26 年度版情報通信白書



参考文献・参考
Web

教育リソース

学修到達目標

6ページ程度/講

e-Learningサイト

第12講 授業を分析してみよう

1. 何を学ぶか

平成27年7月16日に文部科学省より提言のあった、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について（中略まとめ）」において、「教員一人一人が、その職は高度に専門的なものであり、国家社会の活力を作り出す重要な職であるとの誇りを持ちつつ、高い志で自ら研鑽することの重要性が改めて認識されるようになってきた。」とあり、教員の資質能力の向上については、教員基本法第9条においても定められており、教員の資質能力向上は、教員自身の責務でもある。それでは、教員の資質能力とは何か、様々な議論があるであろうが、一つには「授業力」とあるといえる。この授業力を磨き上げていくことは、教員の資質能力の向上にもつながる。そこで、授業力を磨き上げることに考えてみる。

2. 学習到達目標

- ① 授業記録の方法について説明できる。
- ② 授業分析の方法について具体的に説明できる。
- ③ マイクロラーニングの方法について説明できる。

3. 研究課題

- ① 授業改善のチェックリストをグループで作成しなさい。

4. 教材開発の基礎としてのインストラクショナルデザインプレゼン構成（第12講）

5. 映像



6. 資料

授業アーカイブ

第13講 教授・学習の理論と教育実践

1. 何を学ぶか

人が「学ぶ」ということについて、古くからいろいろな領域での研究がなされてきた。教授と学習という概念は、一般に教育者の行う教授活動と、学習者の行う学習活動という意味で理解されている。しかしながら、現実の多くの教育においては、「教授と無関係に成り立っている学習」もあれば、「教授が学習を導けない場合」もある。また、「教師がいなくても行われている学習」であっても「教師からいかなる指示も影響も受けずに学習者が学習を行う場合」もあれば、「教師から与えられた指示のもとに、一人で学習する場合」もある。さらには、「教師の指示に反する方法で学習を行うような学習者」もいる。このように、現実の教育の場においては、教授と学習は必ずしもひとつの教育過程を構成しているとはいえない場合がある。ここでは、このような教授・学習の理論の取扱いについて考える。

2. 学習到達目標

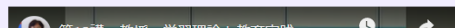
- ① 教授学習に関する基本的な理論を具体的に説明できる。
- ② 行動主義と認知主義の2つの学習論の区別を説明できること。

3. 研究課題

- ① 行動主義的学習論と認知主義的学習論、構成主義的学習論に対応した教材や課題（問題）を作成し、グループで協議をしない。

4. 教材開発の基礎としてのインストラクショナルデザインプレゼン構成（第13講）

5. 映像



2020年11月

2020年10月

2020年9月

2020年8月

2020年7月

2020年6月

2020年3月

2020年2月

2020年1月

2019年12月

2019年11月

2019年10月

2019年9月

2019年8月

2019年7月

2019年5月

2019年4月

2019年3月

2019年2月

2019年1月

2018年12月

2018年11月

2018年10月

2018年9月

2018年8月

2018年7月

2018年6月

2018年5月

2018年4月

2018年2月

2018年1月